

論文の要旨

論文題目 日韓断り行動における言語・非言語ストラテジー
氏名 任 炫樹
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 16 年 3 月 25 日

本稿の目的は、日韓の断り行為に見られる言語行動と非言語行動に焦点をあて、断りを成立させるために使われる両言語のストラテジーの異同を明らかにすることにある。ロールプレイおよびテレビドラマ・映画を用いた調査方法を取り入れ、さまざまな視点から考察を行い、以下のような結論が導かれた。考察の要点を章ごとにまとめてみると次のようになる。

第 1 章の「序論」と第 2 章の「調査方法とデータの処理」に続いて、第 3 章では、断り型を曖昧型・延期型・率直型・弁明型・嘘型の 5 つに分けて、これらの特徴を Grice (1975) の協調の原理 (Cooperative Principle、以下 CP) と Leech (1983) の丁寧さの原理 (Politeness Principle、以下 PP) の枠組の中で明らかにしようとした。その結果、2 つの原理を同時に満足させる断り表現は存在しにくいこと、すなわち CP を優先させた断りはあまりにも明確な断りになって、丁寧さが欠けてしまい、PP を優先させた断りは冗長で曖昧になったり嘘を言うことになってしまって CP に逆らうことになることが明らかになった。また第 3 章では、日本人の代表的な断り表現の型は曖昧型と延期型であり、韓国人の断り表現の代表的な型は率直型と弁明型と嘘型であることが指摘できた。

第 4 章では、日本語と韓国語の断り談話を構成する意味公式を考察し、両言語における断りのストラテジーを比較した。それぞれの言語において好まれる意味公式と言語表現の差をはじめ、1 回目の断りと 2 回目の断りとの間のストラテジー・シフト、およびストラテジー・シフトとウチ・ソト・ヨソとの関連を調べた結果、次の 4 点が明らかになった。

- (1) 日本語でも韓国語でも {ためらい}{理由}{結論} が主に使われるが、それらの使用率にはばらつきが見られる。
- (2) {詫び} と {理由} を示す言語表現が日韓の間で異なる。{詫び} を示す際、日本語では定型表現が好まれるが、韓国語では定形表現から逸脱した表現も多く使わ

れる。また、{理由}を示す場合、韓国語では、日本語にはほとんど見られない物語形式が多用される。

- (3) 日本語の場合、1回目よりも2回目の断りのほうが、{理由}の使用頻度が高くなり、{結論}の使用頻度が低くなる。一方、韓国語の場合には、それと反対の結果が現れている。しかし、両言語ともに、人間関係維持のために必要とされる{代案}{関係修復}{詫び}の意味公式は2回目の断りに多く見られた。
- (4) 日本語の場合、ウチ・ソト・ヨソを区別する基準となるのは{結論}である。全体的に日本語ではウチ・ソト・ヨソ意識が意味公式の使い分けに反映されるのに対して、韓国語ではそのような意識の反映が日本語ほど顕著ではない。

第5章では、日本語と韓国語における断り談話の開始がどのようなマーカーによって標示されるかを、あいづち的な発話を中心に考察した。あいづちマーカーを「ディスコース・マーカーを用いる型」「相手に理解を示す型」「相手の発言を一部くり返す型」「考慮しているそぶりを示す型」「承諾の応答表現を用いる型」「呼びかけ・自称詞を使用する型」の6つに分けて、断り談話の開始に見られるあいづちマーカーの日韓比較を行った結果、次の3点が明らかになった。

- (1) 日本語と韓国語のいずれにおいても、実質的な断り発話に入る前にあいづちマーカーが発せられる傾向がある。あいづちマーカーは、間を設けることによって会話の流れをゆったりさせ、断り談話を和らげる働きをする。また、あいづちマーカーの使用は、直ちに断りを発する場合のぶっきら棒なものの言い方を回避させると同時に、断りを予告するシグナルとしても機能する。
- (2) 初出あいづちマーカーとしてもっとも使用頻度が高いのは、日韓両言語ともにディスコース・マーカーである。その理由は、ディスコース・マーカーが他のあいづちマーカーあるいは緩衝語句の出現を誘発するため、間作りに有効であることに求められる。その他のあいづちマーカーの使用頻度は全般的に韓国語より日本語のほうが高いが、呼びかけ・自称詞を断り談話に前置するのは韓国語の特色である。
- (3) 日本語はウチ・ソト・ヨソの区別に敏感である。特にウチ・ソトとヨソとをはっきり区別する傾向がある。ウチ・ソト場面でよく使われる初出あいづちマーカーがヨソ場面でほとんど使われないのは、そのような意識の表れである。一方、韓国語にはそういう傾向は見られない。韓国語の場合、初出あいづちマーカーの使用頻度とウチ・ソト・ヨソという場面の違いとの間に相関関係らしきものは存在しない。

第6章では、日本語の理由表現の末尾に現れる形式をノデ型、カラ型、シ型、テ型、ケド型、命題型に、韓国語の理由表現の末尾に現れる形式を凶庚拭(tt'aemune)型、

艦猿(nikka)型、辞(seo)型、忝(go)型、濶汽(neunde)型、命題型に分類し、理由表現の末尾がどのように表されるかを考察した。本研究ではこれらを理由表現マーカと呼び、その日韓比較を行った結果、次の3点が明らかになった。

- (1) 日本語の場合、ノデ型・カラ型は多く使われるが、韓国語ではノデ型・カラ型に相当する tt'aemune 型・nikka 型はあまり使われない。この結果は、断り談話における後続節の省略ができるかどうかにも関係する。
- (2) 日本語の理由表現マーカは、ウチ・ソト・ヨソというカテゴリー間でその使用頻度に差が見られる。ウチにはカラ型・シ型・命題型が、ソトとヨソにはノデ型が多く用いられる。韓国語では、ウチ・ソト・ヨソを区別しないで neunde 型が多用される。韓国語でウチ・ソト・ヨソの区別が明確になされるのは命題型である。
- (3) 日本語の理由表現マーカ中止文は、ウチ・ソト・ヨソの違いによって使用頻度に差が見られるものの、その意識とは関係なく現れる。日本語のウチ・ソト・ヨソ意識は、理由表現マーカ中止文の有無ではなく、どのような理由表現マーカで断り談話が終了するか、どのような内容で断り談話が構成されるかに反映される。これに対して韓国語でソト・ヨソ場面に理由表現マーカ中止文の使用頻度が日本語をはるかに上回るのは、neunde 型中止文だけでも十分に聞き手に対する丁寧度と配慮を示すことができるからであると考えられる。

第7章では、Brown&Levinson (1987)のポライトネス理論の一部を取り上げ、日本語と韓国語の断り場面に見られるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(以下、PPS)の比較分析を試みた。PPSを量的・質的差異、ウチ・ソト・ヨソによる差異、男女差という観点から分析した結果、以下の4点が明らかになった。

- (1) PPSの量は、日本語より韓国語のほうが多い。両言語の間には、特にウチ言葉・共通話題の提示の差が著しい。
- (2) PPSの質に関しては、日本語におけるより韓国語において相手のポジティブ・フェイスを重んじる表現が好まれる。日本語の代案提示表現は抽象的な表現が多いが、韓国語の場合は具体的な表現が多い。
- (3) 日本語ではウチ・ソト・ヨソ意識がPPSに明確に反映されるのに対して、韓国語ではそのような意識の反映が顕著ではない。
- (4) PPSの男女差は、韓国語より日本語のほうが顕著である。日本語の場合、男性は代案提示をはじめ、ウチ言葉・共通話題の提示・冗談を使うが、女性は代案提示のみを使う。韓国語の場合は、男女を問わず4つのストラテジーをすべて用いる。

第8章では、テレビドラマ・映画から得られた断り場面の資料をもとにして、日本人と韓国人との間で際立った差異が認められるアイ・コンタクトについて考察を行った。その結果、日本人は断るとき、アイ・コンタクトを気にするが、韓国人はあまり気にか

けず、相手を見て意見を表明する傾向が強いことが明らかになった。また、話がより深刻化すればするほど相手の顔を見ることをできるだけ避けようとする傾向があるという仮説は、日本人には当てはまるものの韓国人には必ずしも当てはまらないことが判明した。

第9章では、日本人と韓国人が断りを表明する際にどのような表情を浮かべるかについて調査した。そして、「微笑」「無表情」「泣き顔」を主たる考察対象として、これらの機能およびウチ・ソト・ヨソというカテゴリーの違いによる表情の差異、申し出の負担度による表情の差異について以下のことを明らかにした。

- (1) 断りにおける微笑は和やかな雰囲気を作り出し、断りの旨を和らげる。一方、泣き顔・無表情は、断りを示すシグナルになったり、言いづらいメッセージが含まれていることを補足したり、強調したりする。
- (2) 沈黙が承認を示すか、断りを示すかは表情によって予測することができる。無表情や泣き顔は承諾を意味することが多い。そして、微笑は断りを意味する傾向がある。
- (3) 韓国人より日本人のほうがウチ・ソト・ヨソの違いに影響を受ける。日本人の場合、ウチにおいては無表情と泣き顔が、ソトにおいては微笑が、ヨソにおいては無表情が多用される傾向がうかがえた。一方、韓国人の場合、微笑を使用する範囲が日本人より広く、無表情・泣き顔の出現率に関してもウチ・ソト・ヨソの違いによる明確な差は見られない。
- (4) 勧誘を断る際に見られる表情は日韓ともに無表情がもっとも多いが、日本人は泣き顔を、韓国人は微笑を好む傾向がある。韓国人の場合、依頼を断る際には微笑の比率が大幅に減る傾向があるなど、申し出の負担度による表情の差が大きい。すなわち、日本人の表情は誰に断りを表明するかに強い影響を受けるが、韓国人の表情は申し出の軽重に強く影響されると言えよう。

第10章では、第3章から第9章までの議論を総括した。

本稿は、「間接的表現を好む日本人と直接的表現を好む韓国人」という一般論を否定する立場から論を進めた。結果として、多くの韓国語母語話者は、日本語母語話者よりも多様な間接表現を用いることによって相手のポジティブ・フェイスを保っていることが明らかになった。このような結果が導かれたのは、断る場面を考察の対象としているからである。反対意見表明場面や不満・文句を言う場面を考察の対象とすれば、上記の一般論を支持する結果が導かれるかもしれない。